

|||||  
近況・随筆  
|||||

## 天売島と焼尻島

式 正 英

天売（てうり）、焼尻（やぎしり）は余り有名とは言えない島だから、いきなり話題に挙げててもその位置さえ咄嗟には思い浮かべられない。「両島は北海道の日本海側の北部、留萌の北の羽幌から西20～30kmの海上にある」と言われれば、その位置だけは記憶に蘇るのだが、属性については殆ど無知の人が多くであろう。ところが最近の観光旅行ブームは、この最果の島々を夏の観光ルートへと捲きこみ、かなりの数の観光客が繰り込むように変わって来ている。筆者もその波にのって1990年8月上旬、この島々を訪ねてみることにした。

両島はわづか3.5km幅の武蔵水道を隔て、東西に相對峙しているが、大きさといひ穏やかな平べったい形と言ひ、概して相似形と受けとつてもよい位似ている。利尻島、奥尻島から佐渡島までの日本海の、本土寄りの沿岸には、「日本海非火山性、段丘島列」の地形区が当てはまることを知ってはいしたが、天売、焼尻の二島は、頂上から麓まですべて曲型的な海岸段丘島であった。天売島は西側にあって、最高所184m、段丘面は6段、面積5.5km<sup>2</sup>、周囲12km、人口687人（1984）、焼尻島は東側にあって最高所は94m、段丘面は5段、面積5.0km<sup>2</sup>、周囲12km、人口697人（1985）である。最高所以外の数字は驚くほど類似している。

段丘面相互の境は余り急な斜面ではないが、直接海に面する現在の海崖の高さには著しい相異がある。焼尻島の南西に面する最高所直下の崖は、高さ80mで結構険しいが、天売島のそれは北西に面し崖高160mに達する。しかも4.5kmも直線上に伸びきわめて壮大な景観を呈する。断崖に露出する岩石は新第三系の火山角礫岩や溶岩のため、暗灰色や赤褐色で粗々しい。人を寄せつけない天売島の険阻な崖は、実は海鳥にとっての自然のサンクチュアリなのである。ウミネコやカモメ、ウトウ（善知鳥）、ウミガラス、ケイマフリ、ウミウなど何万羽という海鳥の繁殖地になっているのである。国の天然記念物に指定され、展望台や観察舎も整備されているが、海鳥の生態観察は6、7月が最良のようである。南西端の赤岩灯台の付近に

あるウトウの巣穴は圧巻である。段丘頂の緩傾斜部の赤土に深さ1～2mの横穴が無数にあいている。薄暮に餌をくわえたウトウは、他の鳥に餌をとられまいとして矢のような速さで自分の巣穴に飛び込むという。ウミガラスは繁殖期に岩の上に並んでウルルーンと鳴くペンギンに似た鳥で、そのためオロロン鳥とも呼ばれる。羽幌から出航するフェリーの船名も「おろろん」、港のシンボル人形もオロロン鳥である。

天売の厳しい様相の自然に対して、焼尻の自然は穏やかな感じがする。その原因は森林植生を良く保持していることと羊飼育用の牧草畑が広がっていることにあろう。天売の段丘面は林地は殆どなく風障にさらされた野草地に低木が疎らに生える程度で耕地も殆どないが、その焼尻には自慢の材料の天然記念物がある。島の東部を蔽っているオンコ（イチイの木のアユ語）の自然林である。オンコは常緑針葉樹で庭に植えて低く丸く仕立てるキャラ木と同類で葉の形はそっくりである。イチイの木は鹿児島島の山中でも見かけたことがあるので、日本列島には一般的にある樹だが、温帯的植物なので対島海流のもたらしたものと思われる。この島のオンコの樹高は7～8m、海風の影響を受ける林地のヘリではハイ松のように2m位の高さに匍匐するが、樹齢は5～600年も経っている。オンコは純林ではなくエゾ松、カラ松、ハウノキ、ミズナラ、ソメイヨシノなど冷帯林、暖帯林と混在しているものの5万本もあるという。

両島は大塩場所といって、幕末から明治にかけてニシンの漁場として開け、今も島の周辺や武蔵堆の漁場を対象にした漁業者が多い。同じような規模の両島だが、焼尻は夏場でも上水道水源に困ることはなく、天売では水が不足しがちである。焼尻の島民が樹林を大切に維持して来た効果が現れたものであろう。火力発電所も焼尻にあって天売には海底電線で送電されるし、焼尻の港近くには明治期の洋館も保存されていて文化的落着きもある。比較地誌学的に見つめるのにこの両島ほど格好な処はないように思う。（1991年1月16日）